

戦争展示の意味 –博物館の国際比較–

国際協力学専攻 47-46856 細川幸太郎

キーワード: 博物館、集合的記憶、戦争、国際比較、歴史

I. 研究の背景

「すでに終わった戦争の解釈が、現在の国際政治の争点になってきた」(藤原 2001)と言われるように、日本のアジア外交において、歴史認識が大きな争点となっている。では、この歴史認識とは、どのような場に表示されるものであろうか。

政府の歴史認識が表出する場として、公式見解、歴史教科書、国立博物館が挙げられる。その中でも、変化の少ないことや特定の物語を必要とする博物館展示に注目し、これまで扱われてこなかった、博物館に表示される国家の歴史認識、集合的記憶を見ていくこととする。

II. 研究の目的

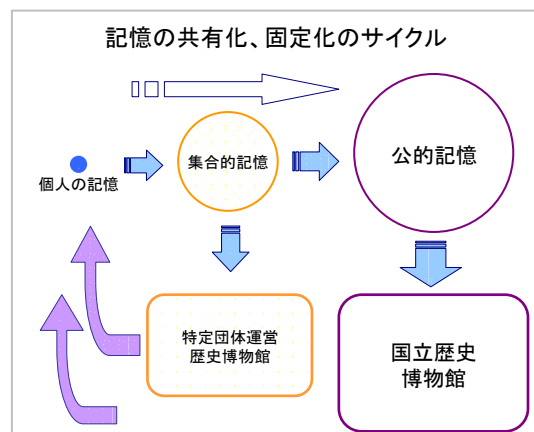
国家の歴史認識が現れる場としての国立博物館に焦点をあて、その展示に含まれる意味を論じる。さらに、被害と加害の視点で各国の戦争を扱った歴史博物館の展示を比較分析し、そこから見える国家の歴史認識に触れ、なぜ日本が歴史認識を問われ続けるのかを明らかにしようとする。

III. 論文の構成

- 第1章 はじめに (背景・目的・先行研究)
- 第2章 博物館の誕生
- 第3章 各国博物館の戦争展示比較
- 第4章 日本の博物館展示の試み
- 第5章 まとめ
(結論と課題、歴史と国際協力)

IV. 先行研究

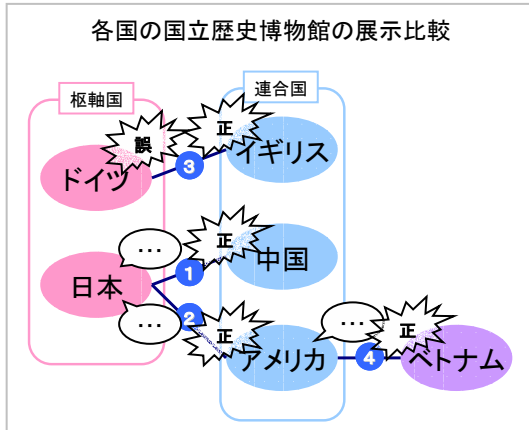
記憶と国家の歴史認識の関係性については、近年盛んに取り上げられるテーマであるが、その議論は成熟していない。その中で、個人の記憶が集団に共有され、固定化され再生産されていく過程においては、体制の思惑を反映した結果であることが指摘されている。これを博物館という“場”における固定化されるプロセスを下図に示す。



V. 国際比較

加害と被害、戦勝と戦敗という視点で、日中戦争、太平洋戦争、欧州における第二次世界大戦とホロコースト、ベトナム戦争の4つの戦争について、当事国の歴史博物館における戦争展示を比較した。そこで語られている“歴史”は異なっている。戦勝国、正しい戦争を行ったとされる国では、開戦から戦争終結までを通史的に展示し、自国の正当性を高めようとしている。一方で戦敗国、現代において非難される戦争を起し

た国では、戦争の経緯を展示するのを避け、一部が抜け落ちているかまたは全く展示が存在していない〔下図参照〕。



例外的にドイツでは、自国の戦争犯罪を認め、通史を展示している。その姿勢を続けることで、現在において周辺諸国と共通歴史教科書を持ちえたのであろう。これは、ドイツは戦争についての国民的コンセンサスが取れ、次の世代へ継承する記憶として、加害の歴史が固まっているのである。

日本においては、国立博物館において戦争通史の展示は見られない。しかし、靖国神社の博物館、遊就館では十五年戦争について「追い込まれ開戦に踏み切った、避けられない戦争」という史観に基づき展示が設計されている。ここで問題なのは、中国に限らず世界のメディアで取り上げられるのは遊就館の展示だということである。靖国参拝と相まって、遊就館の展示が日本政府の歴史認識だと捉えられ、歴史認識が問われ続ける原因のひとつなのである。

VI. 日本の博物館の試み

なぜ日本の国立博物館において戦争展示が行われてこなかったか、日本の戦争展示を巡る歴史的経緯を概観する。

日本で唯一、通史を示す国立博物館とさ

れている国立歴史民俗博物館では、戦争を含めた現代史を展示していない。「政治や思想は馴染まない」という理由により避けられたのである。しかし、戦後 60 年を過ぎ、戦後までを展示しようとする動きが出てきている。また、昭和館を巡る論争についても触れ、国主導での戦争展示設計が如何に多くの障害が発生するかを見てきた。

VI. まとめ

戦争展示の国際比較を行うことで、その国での歴史認識が見て取れることを再確認し、そこから見える、過去への姿勢と現在の状況の結びつきについて論じた。

歴史には「解釈としての歴史」と「一体化としての歴史」というふたつの側面がある。それぞれの民族が自分たちの歴史観や価値の特徴を再構成し、国際政治の場で語る、ナショナル・アイデンティティが争われる時代へと移行しており、今後“歴史”が国際協力において重要なファクターとなるだろう。

<参考文献>

- 石田雄 『記憶と忘却の政治学』 2000 明石書店
- 金子淳 『博物館の政治学』 2001 青弓社
- 国立歴史民俗博物館編 小島道裕ほか著
『歴史展示のメッセージ 歴史展示を考える』
2004 アム・プロモーション
- テッサ・モーリス・スズキ 『過去は死なない メディア・記憶・歴史』 田代泰子訳 2004 岩波書店
- Tony Bennett 「The Birth of the Museum -History, theory, politics-」 1995
- モーリス・アルヴァックス 『集合的記憶』小関藤一郎訳
1989 行路社
- 森村敏己 『視覚表象と集合的記憶 歴史・現在・戦争』
2006 旬報社

指導教官 佐藤仁 助教授

2007 年 3 月 修了